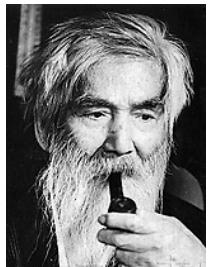


熊谷守一 1880年（明治13）



1880年（明治13）4月2日～1977年（昭和52）8月1日（満97歳没）

画家（洋画・日本画・墨絵）、能書家で木版画や焼物の絵付けもし、自らチエロやヴァイオリンを奏でる音楽愛好家であった。作曲もしている。「画壇の仙人」と呼ばれたが、本人は嫌だったらしい。主に「二科展」に出品。画風は、写実画から表現主義（フォービズム）を経て、抽象的具象画の「熊谷様式」を確立した。売り絵は描いたことがないという。

1880年（明治13）4月2日、岐阜県中津川市付知町に事業家で地主で初代岐阜市長で衆議院議員の熊谷孫六郎の三男として生まれた。幼いころ、父の二人の愛人が住む家に、90畳の一人部屋を与えられ、愛人の家族らと同居した。9歳にして大人のすることは一切信用できないと悟ったという。

1897年（明治30）17歳、上京し、慶應義塾普通科に入学、1年ほどで中退。
1898年（明治31）18歳、共立美術学館入学。
1900年（明治33）20歳、東京美術学校入学。同級生に青木繁ら。
1904年（明治37）24歳、東京美術学校首席卒業後、研究科に3年。
1905年～1906年（明治39）26歳、樺太調査隊に参加。
1909年（明治42）29歳、自画像「蠟燭」が第3回文展で入賞。
1910年（明治43）30歳、母の死をきっかけに故郷に戻り、

数年間、林業、日傭などの力仕事に従事し絵はほとんど描かなかつた。

1915年（大正4）35歳、上京、第2回二科展に「女」出展、以後毎年二科展に出品。友人からの金銭支援。
1922年（大正11）42歳、大江秀子（24歳）と結婚、絵が描けない日々がつづく。貧乏で日々の食事にも事欠き、妻の質屋通いがつづく。売り絵を描く気持ちが涌かなかつたらしい。

1923年（大正12）43歳、長男、黄誕生。1925年、次男、陽誕生。1926年、長女、萬誕生。

1928年（昭和3）48歳、次男、陽（2歳）肺炎で死ぬ。「陽の死んだ日」制作

1929年（昭和4）49歳、二科技塾に参加（約10年間指導）。次女、樺誕生。

1930年（昭和5）50歳、日本画をはじめる。1931年、三女、茜誕生。

1932年（昭和7）52歳、豊島区椎名町千早に妻の実家の援助で家を建てる。

以後、この家と15坪の小さな庭からほとんど出ず、家族、猫、鳥たちと残りの生涯を過ごす。60歳近くになつてから書や墨絵をはじめた。線と余白だけで

喜びも悲しみも表現できる、その可能性に惹かれた



豊島区椎名町千早の家
(昭和50年代に撮影)
現在は、改造されて
豊島区立熊谷守一美術館
術館長は長女の樺氏。



守一筆「陽の死んだ日」1928年
48歳、描いている自分が嫌になり
30分で描くのをやめたという。



守一筆「蠟燭」油絵 1909年 29歳
の自画像 岐阜県立美術館蔵



守一筆「アゲ羽蝶」油絵
1976年（絶筆）96歳



1948年（昭和23）68歳、『ヤキバノカエリ』制作。『心』創刊

1951年（昭和26）71歳、二紀会退会。無所属作家となる。各地で展覧会を開催。1956年（昭和31）76歳、脳卒中で倒れる。晩年の30年間全く外出せず、
自宅の庭で、昆虫や花や鳥などを描きつづけた。

1964年（昭和39）84歳、5月、ダビット・エ・ガニエル画廊（パリ）で個展。

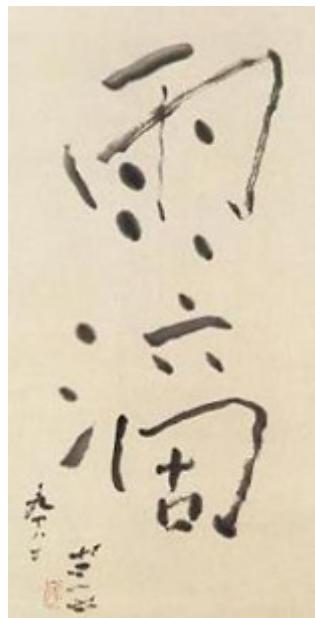
1968年（昭和43）88歳、文化勲章を辞退。（「これ以上人が来てくれては困る」）

1971年（昭和46）91歳、随筆集『へたも絵のうち』刊。各地で個展。

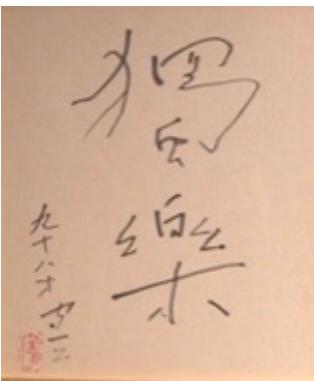
1972年（昭和47）92歳、勲三等叙勲辞退。各地で展覧会開催される。

1976年（昭和51）96歳、随筆集『蒼蠅』刊。「アゲ羽蝶」（絶筆）制作。

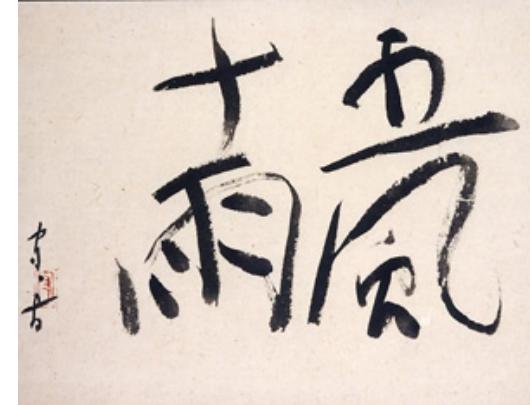
1977年（昭和52）97歳、8月1日、老衰と肺炎のため逝去（満97歳）



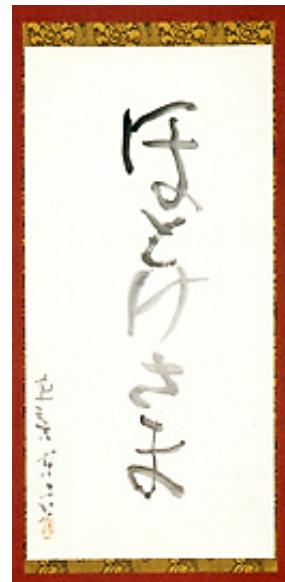
守一筆「雨滴」1977年、97歲



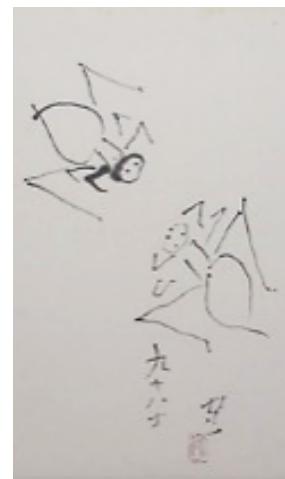
守一筆「独楽」1977年97歳



守一筆「五風十雨」



守一筆「ほとけさま」1973年



守一笔「蟻」部分



守一筆「人生無根蒂」1976年、
陶淵明の「雜詩」其の一か
ら、「人生無根蒂 飄如
陌上塵・・・」
人生は根蒂無し 飄として
陌上の塵のごとし

「私は好きで絵を描いているのではないんです。絵を描くより遊んでいるのが、いちばん楽しいんです。石ころひとつ見ても全く飽きることはありません。」
「なにも書かない白いままでいちばん美しい」（守一）



守一筆「つゆ草」1974年94歳



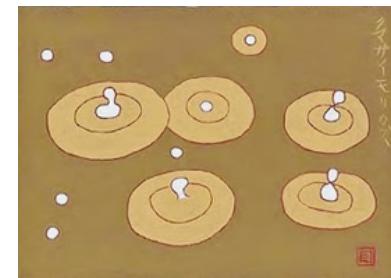
守一筆「豆に蟻」 1958年 78歳



守一筆「白猫」油画 1959 年 79 歲
豊島区立熊谷守一美術館藏



守一筆「鬼百合と揚羽蝶」



守一筆「雨滴」1961年、81歳
愛知県立美術館蔵(木村定三コレクション)

「下手といえど、上手は先が見えてしまりますわ。行き先もちゃんとわかつてますわね。下手はどうなるかわからないい。スケールが大きいですわね。上手な人よりはスケールが大き~い。」



会津八一 1881年（明治14）8月1日～1956年（昭和31）11月21日（満75歳没）

歌人・美術史家・書家 号は秋艸道人、渾齋。青年時代には、八朔、八朔郎と号した。

歌の弟子に歌人の吉野秀雄がいる。新潟市古町通五番町に遊廓會津屋を営む父・政次郎と母・イクの次男として生まれた。兄1人、妹4人、弟1人。早熟で、中学の頃より『万葉集』や良寛の歌に親しんだ。「書き方の時間といふもの程恐ろしいものはなかつた」と回顧す。

八一の学齢期の明治20年代、「硬筆」が学童教育の場に登場、筆記用具、毛筆から硬筆へ。

1899年（明治32）18歳、この頃から「ほとゝぎす」に俳句を投稿し、俳句・俳論（『蛙面房俳話』）を「東北日報」に投稿する。新潟で、来遊した尾崎紅葉と会い、坪内逍遙の講演を聴く。

1900年（明治33）19歳、短冊に短歌や俳句を書く必要から書く道に入つてゆく。

3月、新潟県立尋常中学卒業、上京。6月、根岸に子規を訪ね良寛を紹介、子規は短冊を揮毫し八一に贈つた。八一は帰郷後に『僧良寛歌集全』を子規に贈る。子規は「筆蹟を見るに絶倫なり、歌は書に劣れども万葉を学びて俗気なし」と日記に記した。これが子規との最初で最後の面会だつた。八一は子規から俳句、和歌、漢詩について教わり、子規の俳句革新の影響をうけ、以後句作に熱中。7月脚氣で帰郷。



正岡子規（明治33年）

8月、小学校令施行規則改正、平仮名の字体が一音一字に統一、変体仮名誕生。

あかつきのおきのすさみに筆取てゑがきし花の藍薄かりき 規



子規筆「八一に贈った短冊」

1901年（明治34）20歳、「東北日報」「新潟新聞」の俳句選者となる。俳句結社「木枯会」を起こし、『北越十句集』回覧。同人誌『若菜舟』を出す。

1902年（明治35）21歳、4月、東京専門学校高等予科（現・早稲田大学）に入学。

1903年（明治36）22歳、9月、早稲田大学文学科入学。坪内逍遙に傾倒する。

1904年（明治37）23歳、早大でラフカディオ・ハーンからバイロン、シェリー、

篆刻家山田寒山を尋ねる。子規没（満34歳）

1906年（明治39）25歳、キーツラロマン派の詩や英文学史を学ぶ。日露戦争勃発

1907年（明治40）26歳、7月、早稲田大学英文学科卒業。この頃渡辺文子と出会う。

1908年（明治41）27歳、8月、一茶の「六番日記」を発見する。8月、はじめての奈良旅行。奈良の仏教美術に关心を持つ、この旅が俳句から短歌へ移るきっかけとなつた。八一の新しい芸術的・学問的出発点。

1909年（明治42）28歳、俳句仲間と玻璃吟社を起こす。渡辺文子、与平と結婚。六朝書ブーム

1910年（明治43）29歳、4月、碌山没（満30歳）8月、有恒学舎を辞し、

9月、上京し早稲田中学校の英語教師となる。

1911年（明治44）30歳、健康を害する。8月、房総地方に静養旅行。

1912年（明治45年／大正元年）31歳、7月、腎臓炎で入院。この頃、

秋、早稲田大学文学会で一茶の研究を講演。

12月、郷土研究会に参加。郷土玩具収集に熱中。

愛用の旅行カバン

布・墨書 明治末から大正にかけて使用。会津八一記念館蔵



中学教師時代の八一（大正2年3月）その巨体と風貌に、新入生が「お化けだ！」とつぶやいた。

文子に求婚するも再び失恋。「龍眠会」結成



1912年頃の渡辺文子。文子は鎌木清方の美人画にも描かれたほどの美貌の女性。



41歳
明治34年
八一



渡辺文子（洋画家）
洋画川時雨『美人
伝』大正7年刊より

1903年（明治36）22歳、9月、早稲田大学文学科入学。坪内逍遙に傾倒する。

1904年（明治37）23歳、早大でラフカディオ・ハーンからバイロン、シェリー、

篆刻家山田寒山を尋ねる。子規没（満34歳）

キーツラロマン派の詩や英文学史を学ぶ。日露戦争勃発

1906年（明治39）25歳、7月、早稲田大学英文学科卒業。この頃渡辺文子と出会う。

1907年（明治40）26歳、4月、「新潟新聞」俳句選者となる。一茶の研究。この頃文子に求婚し失恋か？

1908年（明治41）27歳、2月、一茶の「六番日記」を発見する。8月、はじめての奈良旅行。奈良の仏教美術に关心を持つ、この旅が俳句から短歌へ移るきっかけとなつた。八一の新しい芸術的・学問的出発点。

1909年（明治42）28歳、俳句仲間と玻璃吟社を起こす。渡辺文子、与平と結婚。六朝書ブーム

1910年（明治43）29歳、4月、碌山没（満30歳）8月、有恒学舎を辞し、

9月、上京し早稲田中学校の英語教師となる。

1911年（明治44）30歳、健康を害する。8月、房総地方に静養旅行。

1912年（明治45年／大正元年）31歳、7月、腎臓炎で入院。この頃、

秋、早稲田大学文学会で一茶の研究を講演。

12月、郷土研究会に参加。郷土玩具収集に熱中。

愛用の旅行カバン

布・墨書 明治末から大正にかけて使用。会津八一記念館蔵



小泉八雲



つはうちしょよよ
坪内逍遙
八一が最も尊敬
した恩師。

書道もろもろ塾（2016.3.20）

1913年（大正2） 32歳、10月、早稲田大学英文科講師を兼任。最初の「潤規」を書く。

1914年（大正3） 33歳、東京小石川区高田豊川町に転居し、家を、「秋艸堂は我が別号なり、学規

は吾、率先して躬行し範を諸生に示さん」とを期す。主張この内にあり、同情この内にあり、

反抗またこの内にあり」（新潟新聞）に寄せた「落日庵消息」から

をはじめる。学童用鉛筆全国的に普及をはじめる。

「落日庵」「秋艸堂」「翠蓮亭」と称する。

8月、「学規」四則を定める。

「拙居家塾の塾生の為めに定めしもの」

と注記。

第一次世界大戦勃発、

11月、自宅でギリシャ古代研究の講義

をはじめる。

「学規」を書く。

1915年（大正4） 34歳、腎臓を病み、房総地方で静養。

1916年（大正5） 35歳、中村屋の相馬夫妻と知り合う。

八一は、早稲田中学校学生であつた、

相馬夫妻の長男安雄を落第させた、

いさぎよく落第させたことを徳として、

八一にお札を言うため相馬夫妻が八一を訪ねて来た。この事が交友の始まりらしい。

中村屋の看板や包装紙に八一の書が残つてゐる。漱石没（満49歳）

1918年（大正7） 37歳、3月、早稲田中学教頭となる。文子、亀高五一と再婚。

1919年（大正8） 38歳、豊川町の別の家に転居。文子、「朱葉会」創立に参加。文部大臣が毛筆廃止論

1920年（大正9） 39歳、9月、日本希臘学会を創立、会長となる。奈良各地を歩く。「潤規」を書く。

1921年（大正10） 40歳、教頭排斥運動起る。静養と旅に明け暮れる。西国放浪。写真家、小川晴陽と邂逅。

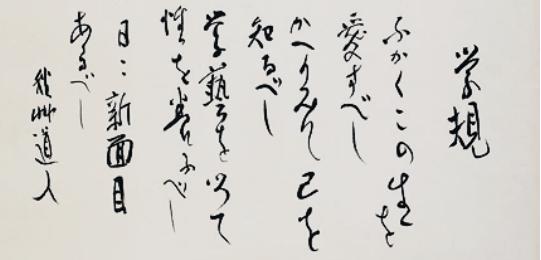
大正10年11月16日、八一は、ひとり東京を発ち、大阪から海路で大分に渡り、中津の大雅堂（大分県中津市新魚町の自性寺内）、白杵の石仏群などを調査し太宰府から熊本、長崎、安芸の宮島、尾道を経て帰京。明けて大正11年1月、ふたたび奈良から高知、宿毛から白杵へ渡り、石仏を調査し、2月18日帰京、この、大正10年から11年にかけて百日に及ぶ旅によつて、「放浪吟草」が生まれ、大自然や古代美術のおおらかな心にふれ、苦悩や腎臓障害などからも解放されたが、何よりも大きな出来事は自性寺で池大雅の作品に出合い、書家として自信を持つたことであつ

溪路烟消江月出 草堂門掩海濤深 九霞（溪路烟消えて江月出づ 草堂門掩して海濤深し 九霞）

池大雅筆 紙本墨書 梵装
132.4×58.6 cm 自性寺蔵



大正7年12月の八一



秋艸道人

学規

八一筆「学規」



せんそうでつ
銭瘦鉄画「落合山荘」



白杵の石仏

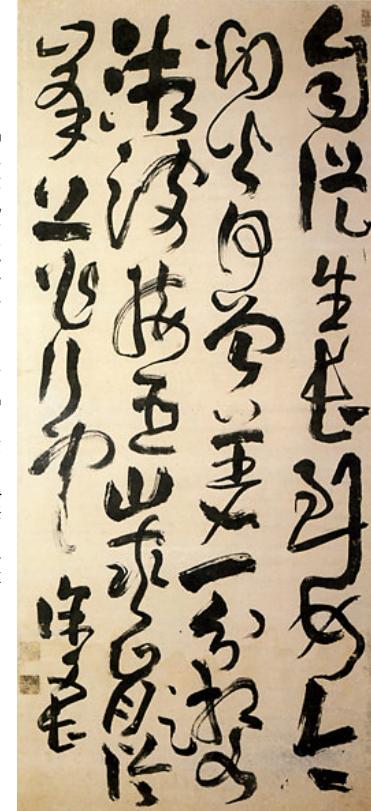
1922年（大正11）41歳、新年から奈良、四国、九州を旅する。



池大雅画「蟠幹香雪図」紙本墨画 褙装
132×58 cm 自性寺藏



りはく めいこうかく
池大雅筆「李白・鳴臯歌句」
紙本墨書・襖装 130×53 cm
自性寺藏



じよい すいせんらんし
池大雅筆「徐渭・水仙蘭詩」
紙本墨書 褙装 133×58.2 cm
自性寺藏

いにしへの ひとにありせば
なほざりに 烏がきしらんの
おほかれど ふでにみる くしきあだくみ
ものかかましを もろともに ここるゆららに
わがこひやまづ なつかしきかな
むかしひとたみのあと
なみだながる

「自己が書家として開眼し、
その独自性の自信を得たの
は、この自性寺の大雅との出
会いのときからである」
（植田重雄『秋艸道人会津八一の
生涯』）

「自性寺の大雅堂にて」4首
池大雅に感激した八一は
「自性寺の大雅堂にて」4首
を詠んだ。



下落合の秋艸堂



中津・自性寺の大雅堂

10月、ふたたび奈良を旅し、多くの歌を詠む。小川晴暘、飛鳥園を創業。

八一は、

「絵を描く事は心の中からの止むべからざる要求を本にして我々の行ふ修養の一つ」と說いた。

しげりたつ かしのこのまの あおぞらを
ながるるくもの やむときもなし 八一

八一は、音楽とともに美術教育にも熱心であった。彼は、早稲田中学の美育部の伝統を守つたといふ。この美育部からは中村彝、萬鉄五郎、曾宮一念、内田巖、小泉清らが育つた。

かすがのに おしてるつきの ほがらかに

あきのゆふべと なりにけるかも (春日野にて)

おほてらの まろきはしらの つきかげを

つちにふみつゝ ものをこそおもへ (唐招提寺にて)

しぐれふる のぞゑのむらの このまより

みいでうれし やくしじのたぶ (薬師寺)

あめつちに われひとりゐて たつごとき

このさびしさを きみはほほゑむ (法隆寺・夢殿救世觀音に)



1923年（大正12）42歳、3月、日本希臘学会を解消し、

奈良美術研究会を創立、会長に。8月、室生寺の撮影取材開始。関東大震災

1924年（大正13）43歳、1月、奈良へ旅する。12月、中村彝没（37歳）

11月、『室生寺大觀』刊行。

12月、第一歌集『南京新唱』（春陽堂）刊行。

歌人として無名に近い八一の第一歌集は、ほとんど反響



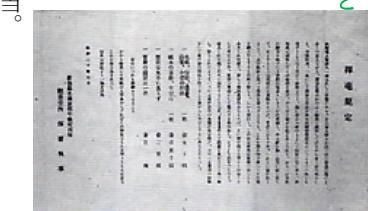
1925年（大正14）44歳、3月、奈良から吉野を旅する。

早稲田中学校を辞す。

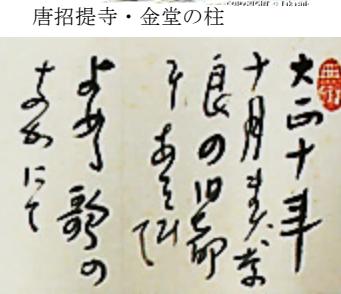
4月、早稲田大学付属高等学院教授となる。

11月、奈良を旅する。

1926年（大正15／昭和元年）45歳、3月、奈良旅行。



八一の「揮毫規定（潤筆規定）」色紙・短冊など1枚、金50円、半切1枚、金150円などと書かれている。（これは昭和20年のもの）



大正十年十月また奈良の旧都にあそびてよめる歌のなかにて

八一の歌は、「調べ大きく、莊重で、仏像や寺院への純粋な讚仰の心が貫かれている」（来嶋靖生氏）



唐招提寺で（昭和5年）絵付けしている八一

1929年（昭和4）48歳、1月、奈良の旅。

4月、古美術研究誌『東洋美術』創刊。6月1日、父死去（76歳）

夏、「壺中居」を揮毫。錢瘦铁来日、10月、秋艸堂に來訪。

1930年（昭和5）49歳、1月、早稲田大学東洋美術史学会を創立、会長となる。

11月、長野県東筑摩郡朝日小学校で「推古時代美術の研究」を講演。

1931年（昭和6） 50歳、2月、早稲田大学文学部教授となる。

8月、奈良を旅する。
11月、奈良、神戸を旅する。

9月、満州事変勃発 頽廃したアカデミズムに倦む

「本集の歌は通巻殆ど仮名をもつて綴れり・・・」
（『鹿鳴集』例言）

1933年（昭和8） 52歳、5月、『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』刊行。
11月、私家版歌集『南京余唱』刊行。作歌に心開く

この年から高橋きい子が家事をみる。書道に心開く

1934年（昭和9） 53歳、4月、私家版歌集『村莊雜事』を自筆の書で刊行。

7月、文学博士の学位を受ける。

10月、早稲田大学恩賜記念館に東洋美術史研究室を設置。
1935年（昭和10） 54歳、2月、逍遙没。



7月、東京市淀橋区下落合に転居（通称目白文化村）

斎号を滋樹園、翠漣亭と称す。木曜会誕生。

1937年（昭和12） 56歳、2月、熱海に「逍遙先生筆塚」の碑を建立。



1938年（昭和13） 57歳、4月、早稲田大学文学部に芸術学専攻科設置、主任教授となる。改造社の『新万葉集』巻四に短歌を掲載。

1940年（昭和15） 59歳、5月、歌集『鹿鳴集』刊行（祖国の眞の美しさを知るための必読書とされたらしい。これは『南京新唱』『南京余唱』

などにその後の歌を加え編集された。第一歌集『南京新唱』のときとちがつて、大好評で多くの讃辞が寄せられた。）
12月、母死去（79歳）。



『鹿鳴集』
本首平仮名表記

1941年（昭和16） 60歳、5月、銀座鳩居堂で還暦記念書画展開催（40余点完売）。

8月、書画図録『津斎近墨』刊行。「潤規」をつくる。

12月、太平洋戦争勃発

「八一の歌は、他の歌人にはい流麗な筆をとつて書に記すということと無関係ではない。歌はそれは口に吟じ、毛筆をとつて書に記すということと無関係ではない。歌は歌うべきものであるという信念があり、その表記じたい、意味に依存しがちな近代短歌への批判を内包するものなのである。」
(来嶋靖生氏)



八一筆「及其至也・不亦樂哉」楹聯 昭和16年
(1941)、春吉田憲一郎刻 會津八一記念館藏

其の至るに及ぶや、亦た樂しからずや 秋艸道人題

1942年（昭和17） 61歳、4月、新薬師寺に歌碑第一号「ちかづきて」建立。

10月、『津斎隨筆』刊行。

1943年（昭和18） 62歳、3月、東大寺大仏讚歌十首を献ずるため奈良に行く。



10月、春日大社境内に「かすがのに」の歌碑建立。



何かに華頂の上に游べば 日朗らかに星光輝く 四顧すれば晴空の裏 白雲鶴と共に飛ぶ 寒山詩 秋艸道人

しす

遊・游・華頂上・日郎・書・光輝
四・秋・晴・空・雲・白・雲・鶴・同・鶴・飛

寒山詩 秋艸道人

八一筆「寒山詩」

書道もろもろ塾(2016.3.20)

菩提提薩埵埵依般
苦波羅窓窓ノクノ故
・無生無死無三界
・無故無煩惱恐怖
遠離一切顛倒
夢の究竟涅槃

八一筆「般若心経」の一節 昭和18年7月10日

戦争末期なのに、八一は現実離れした詩文を揮毫している。
このような表現世界を「沈鬱蕭散」というのか。
まちゆけば ぱうくうがうの あげつちに
をぐさあをめり あめのいとまを 八一
わがやどの かべのふるぶみ くれなゐに
もえなむさまを おもふこのころ 八一
ひともとの かさつゑつきて あかきひに
もえたつやどを のがれけるかも 八一

「歌ころが、ありのままに現れて居るか居らぬか、を書の良し
悪しの判定の基準としている・・・」(足田實吉氏)

1944年(昭和19) 63歳、2月、高橋きい子を養女とする。

9月、歌集『山光集』刊行。

1945年(昭和20) 64歳、3月10日、東京大空襲 4月14日、空襲により滋樹園全焼。

15日、早稲田大学教授を辞任。30日、新潟県北蒲原郡中条町西条の丹吳家へ疎開したが、数ヶ月後、きい子の結核が悪化し、感染を恐れて、八一はきい子とともに、村はずれの観音堂に移り住んだ。障子に紙がないような部屋で、家事一切を八一がしなければならなかつた。4月、斎藤茂吉と初めて対面する。

7月10日、観音堂できい子病死(33歳)。「山鳩」「観音堂」を詠む。

やまばとの とよもすやどの しづもりに なればもゆくか ねむる」とくに
あひしれる ひとなきさとん やみふして いくひききけむ やまばとのこゑ
ひとのよに ひとなき」とく たかぶれる まづしきわれを まもりこしきも
かなしみて いづればのきの しげりはに たまたまあかき せきりうのはな
きい子の百か日に知人に配布した。

「潤規」をつくる。8月、終戦

10月、京都、奈良に旅する。11月、新潟市内大和百貨店で個展開催。
この頃から揮毫に全力を傾げ、以後、書三昧の生活に入る。

学問と名声を利用して書画の個展を開催し、書人としての地位を確立していった。

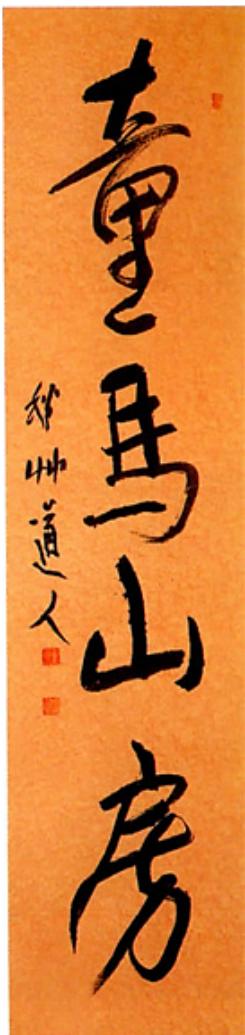
12月、私家版歌集『山鳩』刊行。



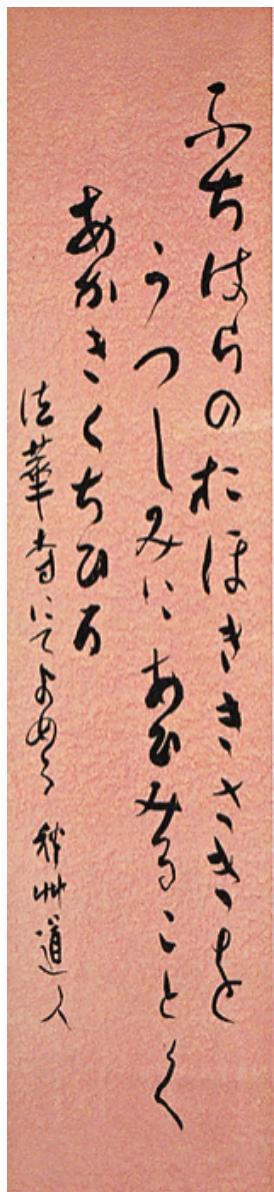
観音堂全景



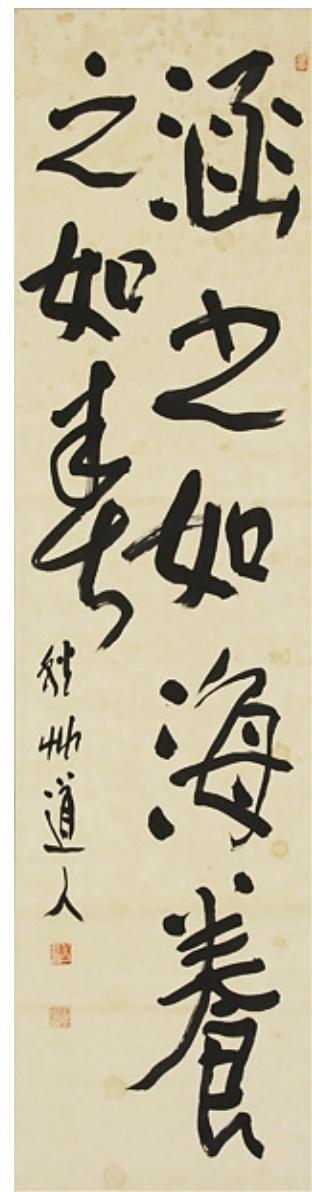
『山鳩』2種 4頁の和綴じ本



八一筆「童馬山房」昭和20年
「童馬山房」は斎藤茂吉居宅の斎号。八一が茂吉邸を訪問した際に揮毫したうちの1枚。八一は昭和20年4月、茂吉と初対面し、防空壕で酒を酌み交したといふ。



八一筆 半切 昭和 25 年頃
大き后は光明皇后のこと。



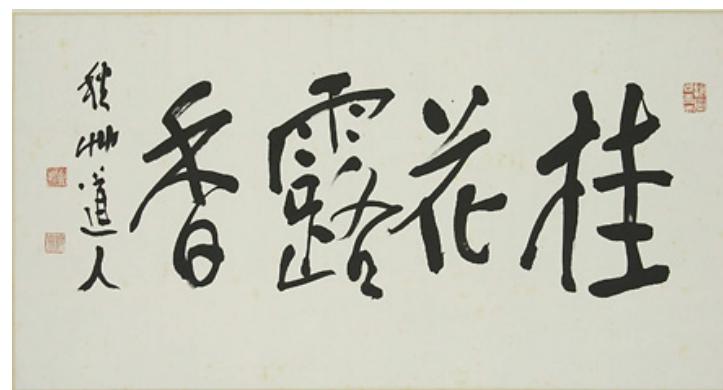
八一筆「涵之如海、養之如春」
126×31.8 cm 早大図書館蔵



八一筆「秋艸堂」扁額 昭和 22, 3 年 33×87.58 cm 新潟市會津八一記念館蔵



八一筆「獨往」軸 昭和 20 年代 28.5×57.5 cm 新潟市會津八一記念館蔵



八一筆「桂花露香」軸 34.9×66.6 cm 早稲田大学図書館蔵
桂花は露も香し (禅語) 桂花とはモクセイのこと。



1947年 (昭和 22)

66

歳、

4月、

歌集

『寒燈集』

昭和 19 年 6 月以後の 212 首を収録。

くわんおんの だうのいたまに かみしきて
うどんのかびを ひとりほしをり ハー



会津蘭子 (宮城道雄門下で琴をよくした人)

5月、「夕刊ニヒガタ」創刊され、同社社長に就任。
7月、伊藤文吉別邸 (現・北方文化博物館新潟分館) 内の洋館に転居。ここを「南浜・秋艸堂」と呼び、永眠するまで暮らした。中山蘭子が家事をみる。

6月、新潟の小林百貨店で近作書画展開催。
5月、『遊神帖』刊行。「いろは」、「あいうえお」に。
くわんおんの だうのいたまに かみしきて
うどんのかびを ひとりほしをり ハー



北方文化博物館新潟分館 (八一終焉之地)

1946年 (昭和 21)

65

歳、

3月、京都大丸にて個展開催。

ほっぽうぶんか

7月、

伊藤文吉

別邸

ほっぽうぶんか

現・北

方

文

化

博

物

館

新潟分館

1948年（昭和23）

67歳

5月、早稲田大学名譽教授となる。

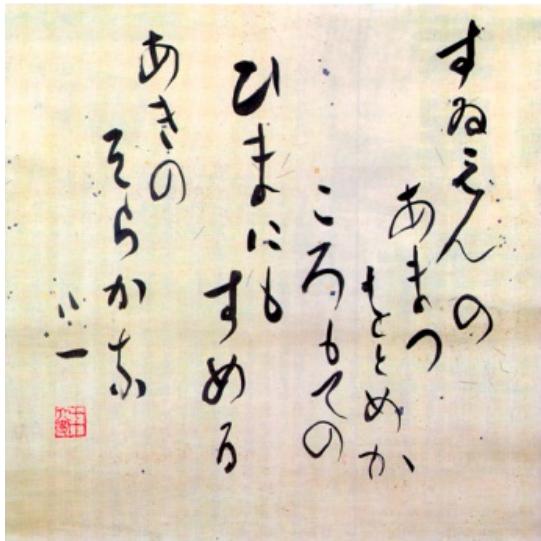
日展に書が参加

1949年（昭和24）

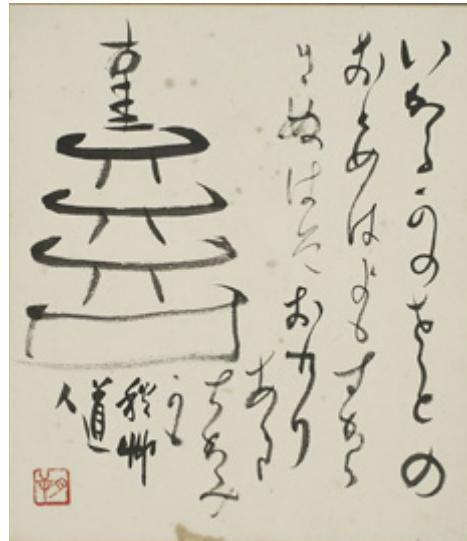
68歳

3月、新宿中村屋にて書画個展開催、昭和26年以降毎年開催。

早稲田大学図書館内に会津博士紀念東洋美術陳列室開く。



八一筆
すみえんの あまつをとめか ころもての
ひまにもすめる あきのそらかな ハー
薬師寺東塔を詠んだ歌。



八一筆「自画自讚」昭和5年（1930）色紙
21.1×18.2 cm 早稲田大学図書館蔵
「いかるがの さとのおとめは よもすがら
きぬはたおれり あきちかみかも 秋
艸道人」 百万塔の画が描かれている。
連綿し変体仮名もつかっている、若書きの書。



八一筆「林下十年夢 湖邊一笑新」1949年11月、中村屋藏
新宿中村屋での書画個展出品作。『禪林語句集』より。対聯
「りんかじゅうねんのゆめ こへんいつしょあらたなり」
秋艸道人

この作品は日展に出品しようと予定して書いたものらしい。



八一、昭和25年、自宅で
撮影：土門拳

西川寧らにより日展審査員候補にあげられ、一旦、八一は同意したが、尾上柴舟の猛反対にあい実現しなかった。西川らはせめて招待出品もとと考えたらしいが、八一は日展への関与を一切拒絶した。

11月、新宿中村屋にて近作書画展を開催。

12月、「夕方ニヒガタ」廃刊。山陽新聞社主催、八一の個展のための作品焼却事件。

5月、中山蘭子を養女にする。



「…草仮名は…公卿とか官女とかいふ、およそ今日の日本人とは、生活も、感覺も、気分も、かけ離れた人たちの手で出来たもの…」「今日は今日の仮名を見出して、これを実用にもし、その中から芸術をも見出して行くべきである。」

「芸術として書くからには、字さへ上手に書けば文句は何でもいいといふわけには行かない。その中に盛つてある思想も感情も、まづ自分のものでなければいけない。自作でないとしても、自分でほんとに感動したものでなければならない。」

「筆法といへば、何かいかめしい法則のやうなものがあるやうに、普通には思はれやすいが、書道ばかりでなく、何事にも、最初から法則などいふものがあるものではない。」

「今日にいふところの筆法といふものは、もとより便宜上のもので、決して根本的のものでない。書道にもしもつと大切なものがなければ、骨法とでもいふべきものが、あるのではないかと私は思ふが、…」

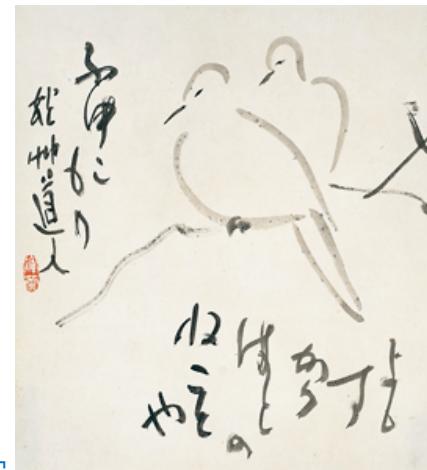
（会津八一「現代の書道」昭和25年より）

由比樓博又 よせたる

まるさーーと
まなこにみつ
あきののゆ

成壇院をいでて ハ一

八一筆「毘樓博又」

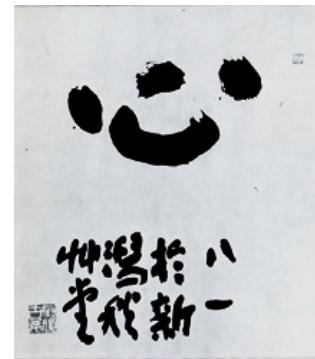
八一自画譜「よもすがらはとのねごとや
ふゆごもり 秋艸道人」

執筆中の八一 (昭和25年11月)

の書道 (昭和25年1月より)



八一筆「無」色紙 個人蔵

八一筆「心」色紙 個人蔵
心 八一於新潟秋艸堂『会津八一全歌集』
単語単位 平仮名分
かち表記 (切字法)

1950年 (昭和25) 69歳

3月、仙台で「書道の諸問題」を講演。
6月、朝鮮戦争勃発

(会津八一「現代の書道」昭和25年1月より)

1951年 (昭和26) 70歳、

1月、新潟日報社員となる。
3月、新潟市名譽市民に推薦される。
5月、読売文学賞受賞。
6月、朝鮮戦争勃発

執筆中の八一 (昭和25年1月より)
土門拳撮影

「書家たちが、ほんとに物を書いて、この世の中に貢献したいならば、全くあたまを切り替へて、ペンキ屋の持つ尖の平たいブラッシの筆法や、万年筆や鉛筆の、細い針金のやうな線のために、能率の高い筆法を工夫してみなければならぬ。…その硬い筆の吐き出すところの細くて硬い線の中から、どうしたら芸術を見出し得べきかに、心を尽くさなければならない。これこそ在來の毛筆による筆法の研究よりも、もつと意味の深い研究であらう。日展には別に篆刻もあるが、これは印刀で石や銅に篆文を刻む。これはもとより一つの立派な書道である。このやうに、ペンや鉛筆で硬い西洋紙の上に物を書いたものが、日展の書道部の一つの種目となる日が遠くないやうにしたいものだ。」(会津八一「現代の書道」昭和25年1月より)

「奈良東大寺戒壇院
戒壇堂広目天」部分

1月、新潟市名譽市民に推薦される。
5月、読売文学賞受賞。

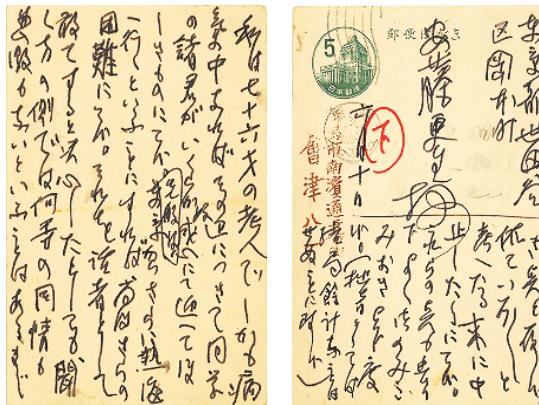
6月、朝鮮戦争勃発

1月、新潟日報社員となる。

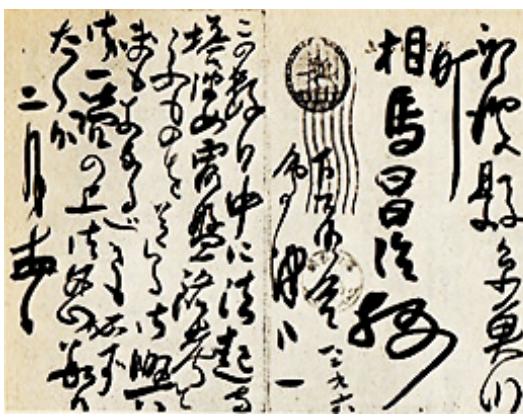
3月、新潟市名譽市民に推薦される。

5月、読売文学賞受賞。

6月、朝鮮戦争勃発



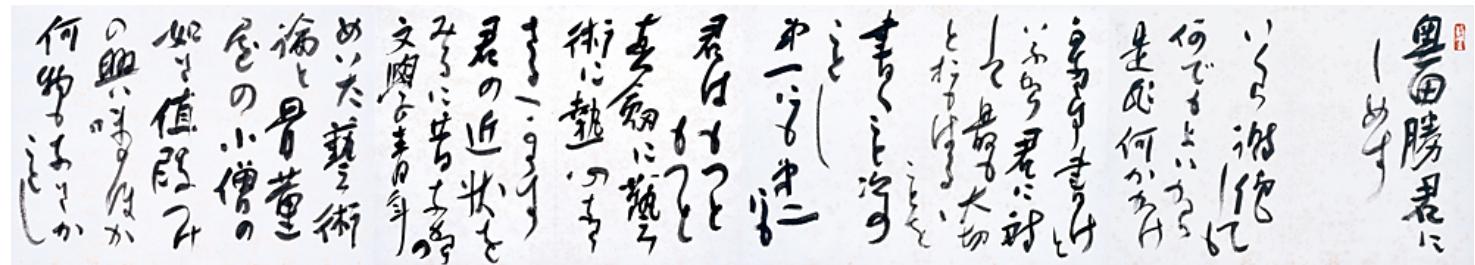
八一筆「安藤更生宛はがき」昭和31年6月10日
安藤の見舞状への返事。 新潟市会津八一記念館蔵



八一筆「相馬御風宛はがき」昭和6年2月24日

新潟県糸魚川町
相馬昌治様
下落合一二九六
会津八一

「この頃、会津八一の書簡体が完成の域に達しれた。」(長坂吉和氏)
「この数日中に法起寺塔婆露盤銘考といふものを送る。御興味もながるべきも必ず御一読の上御感承り
たく候。二月十四日



八一筆「與奥田勝書」昭和17年(1942)5月11日書簡部分 15m×84cm

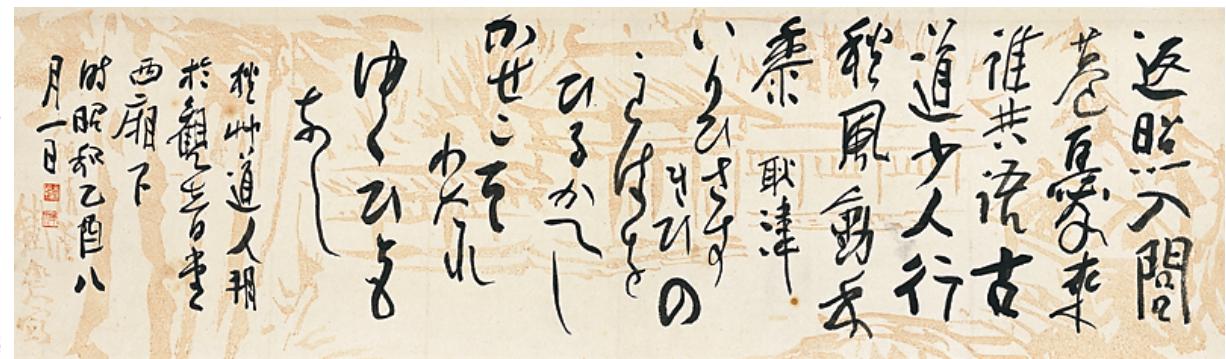
小さな栗の木美術館蔵(信州小布施町) 諸君に謝り申す。いくら何が何でも書けといふから君に對して最も大切とおもはることを書くこと次のとおり。第一にも第二にも君はもっとともと真剣に藝術に熱心ならざるべからず。君の近状を見るに昔ながらの文明子青年めいた藝術論と骨董屋の小僧の如き値段つけの興味のほか何物もなきがごとし。・・・美術家は、己が作品が何よりも雄弁に藝術の精神を發揮顯彰するが故に、議論に訥なりとも少しも恥づべきにあらず。むしろ立派なる態度といふべし。美術家はすべからく空論に口を送ることをやめて、もっと謙虚に、もつと熱心に、自然を又人生を詠観し、努力してやまざらむことを要す。然らずんば、何を以て美術家などと称することを得ん。空論家とか空談家ともいふべきなり。即ち天下に無價値なる存在となるべし。・・・予は藝術に於て何人の説明も教授も受けず、受けても遵奉せず、みだりに人を訪問せず、みだりに會合に出席せず、貧乏のうちに志を上げまし、曲りなりにも今日此の老人に至りて、やうやくいくらかの自覺を得たり。君もし予以上の人ならば、予が門に書きしところを熟読玩味し、日々反省して、大に新面目を示さるべきなり。・・・

おみせまち
(秋日)

「奥田勝君にしめす。いくら何が何でもよいから書けといふから君に對して最も大切とおもはることを書くこと次のとおり。第一にも第二にも君はもっとともと真剣に藝術に熱心ならざるべからず。君の近状を見るに昔ながらの文明子青年めいた藝術論と骨董屋の小僧の如き値段つけの興味のほか何物もなきがごとし。・・・美術家は、己が作品が何よりも雄弁に藝術の精神を發揮顯彰するが故に、議論に訥なりとも少しも恥づべきにあらず。むしろ立派なる態度といふべし。美術家はすべからく空論に口を送ることをやめて、もっと謙虚に、もつと熱心に、自然を又人生を詠観し、努力してやまざらむことを要す。然らずんば、何を以て美術家などと称することを得ん。空論家とか空談家ともいふべきなり。即ち天下に無價値なる存在となるべし。・・・予は藝術に於て何人の説明も教授も受けず、受けても遵奉せず、みだりに人を訪問せず、みだりに會合に出席せず、貧乏のうちに志を上げまし、曲りなりにも今日此の老人に至りて、やうやくいくらかの自覺を得たり。君もし予以上の人ならば、予が門に書きしところを熟読玩味し、日々反省して、大に新面目を示さるべきなり。・・・

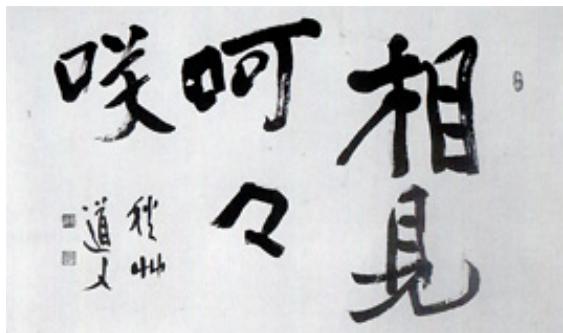


奥田勝作「恩師会津八一先生の像」(眼鏡は紛失)



八一筆「漢詩の短歌翻訳」1945年(昭和20)8月1日『唐詩選』から「返照入閨巷」「いりひさす」會津八一記念館蔵

返照入閨巷
(秋日)
耿津
(秋日)
返照は閨巷に
入り、憂ひ来つて
誰か共に語らん、
古道は人の行く
少なし、秋風は禾
黍を動かす
耿津
いりひさす
きびのうらはを
ひるがへし
かぜこそわれ
ゆくひともなし
秋艸道人朔
西扇下
月一日
時昭和乙酉八
於觀音堂
西扇下
富岡鉄斎の画
を刷った詩箋に
書かれている。
漢字と仮名が
調和した、会津八
一の傑作。



八一筆「絶筆」2点のうちの1点 昭和31年(1956) 禅語「相見呵々咲」しようけんしてかかとわらう



八一遺愛の文房具 新潟市会津八一記念館蔵



新潟市会津八一記念館



早稲田大学会津八一記念博物館

「かれは、みずから、東洋画の伝統をふまえて、書、詩、画一致の境地を、新しく創りだそうと意識していた。書と詩と画とを分離してしまっている書壇の、文学を喪失した書家への、はげしい批判の上にたつての嘗みであつた……」(宮川寅雄『会津八一』より)

1956年(昭和31)75歳、4月、高村光太郎没 八栗寺鐘銘揮毫に体力を消耗した八一は急激に体調を崩した。

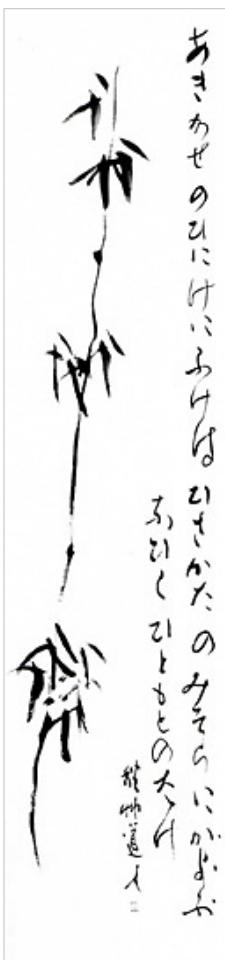
11月21日、冠状動脈硬化症で永眠。

「純粋で孤独な八一の一面を垣間見せた事件である」(長坂吉和氏)

ごけんさんやくりじ 晩秋、讃岐の五剣山八栗寺の鐘銘揮毫。

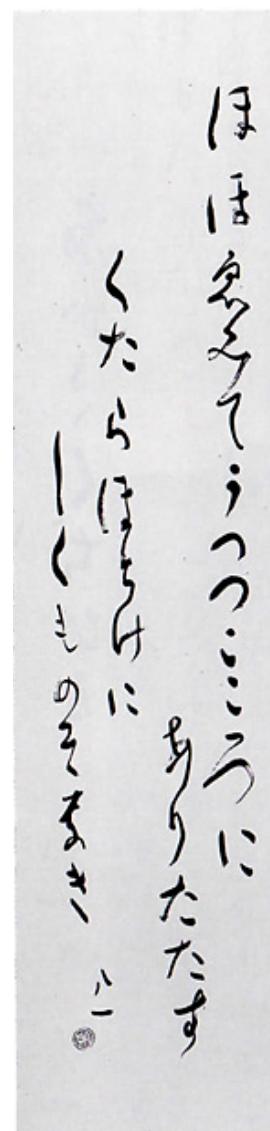


作品を選ぶ八一
1950年(昭和25)11月



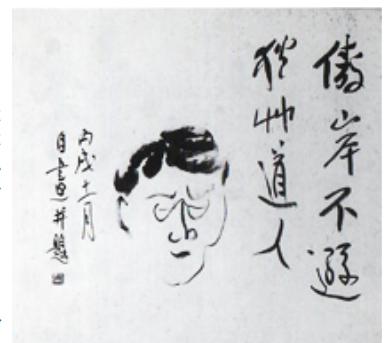
八一筆「条幅」自画題歌
135.0×32.4
早稲田大学會津博士紀念東洋美術陳列室蔵

あきかぜのひに
にふけばひさかたの
みそらに(かよふ)
なびくひととのだけ 秋艸道人

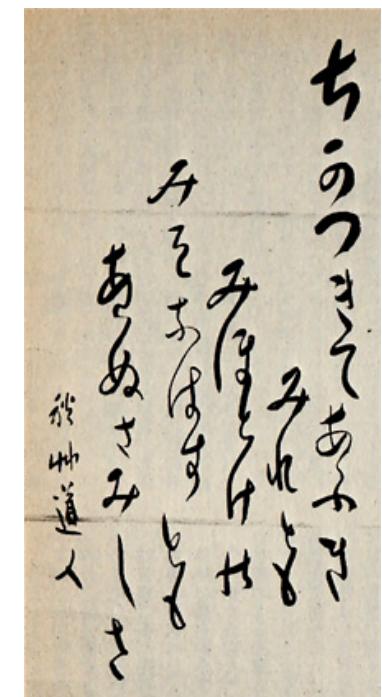


八一筆「条幅」
135.0×32.5 cm
早稲田大学會津博士紀念東洋美術陳列室蔵

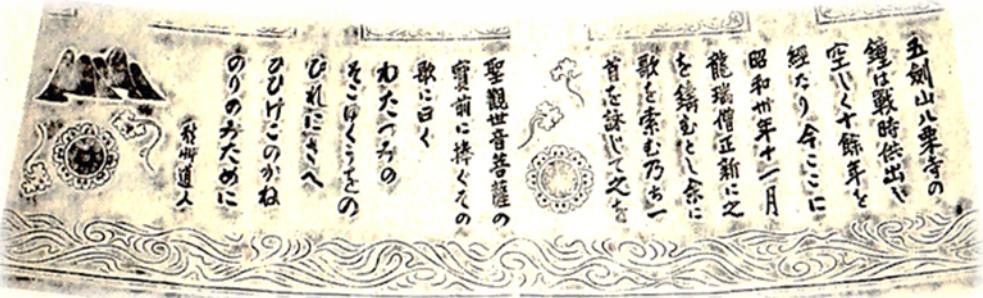
書道もろもろ塾(2016.3.20)



八一自画贊「傲岸不遜」丙戌(1946年)



しんやくしじかひそこう
八一筆「新薬師寺歌碑草稿」
ちかづきてあふぎみれども
みほとけのみそなはすとも
あらぬさみしさ 秋艸道人



ごけんさんやくりじょうめいたくほん
五劍山八栗寺鐘 銘拓本

「・・・このお寺の釣鐘に彫りつけられた文章の文字を、現代の我々が日常用ひてゐる仮名の交つた文章にする事になった。・・・この銘文の筆者として第一に私が氣をつけたことは、・・・美辭麗句式にならぬやうにして、一日で読めるだけ行を跨がず、続いて、實際何を云つて居るのか、読む人にわからぬやうなら、何よりも大失敗だと思つたので、私はそんなことに一番気をつけた。そして、まるで学問などのない、小学生が読んでも、大体の意味がわかるやうにしたいと思つた。・・・」

（会津八一「隨筆「八栗寺の鐘」より）



昭和 22 年 4 月、砂に字を書く八一
(新潟市寄居浜にて)

「字というものは、自分の考えを人に知らせるためのものであり、同時にまた、人の考えを自分が知るためのものである。だから上手下手ということよりもっと大切なことは、お互いの意志を伝えるために最も適した形式をもつたものこそ、人生において一番大切な文字であろう。私は、とても字は上手にはなれないけれども、・・・人にわかるような字を書かなければならぬ。・・・」

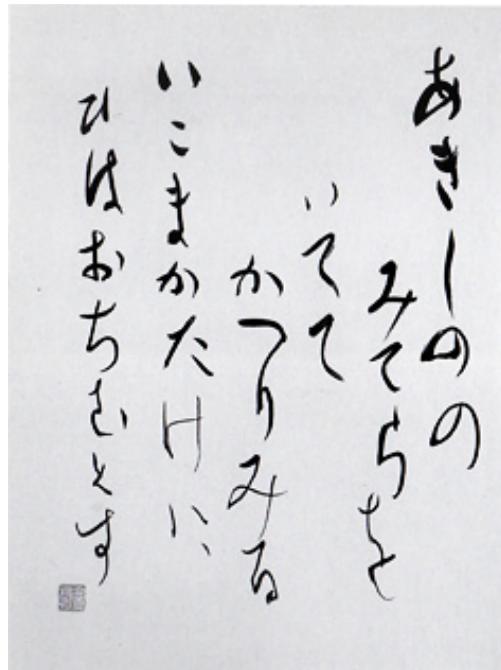
（会津八一「遊神帖」自序より）

「予は書画に於て師承することなし。ただ群書を読みて、ほぼ変遷の大勢を知り、伝世の名蹟にして、寓目せるものまた多きによりて、その間、おのづから会得するところあるが如きのみ」

（会津八一「東洋文藝雑考」より）

「・・・國民生活の日用品としては、漢字に仮名を交ぜたものを使つて居ります。それであるのに、いざ展覧会となると、主として漢字を書く書家と、主として仮名を重しとする書家とが、たがひに違ふ氣持で、そして違ふ理想で字を書いてゐるのであります。それは仮名を書く人は、今から六七百年前の・・・有名な書き手の流儀を墨守してゐる。草仮名とか、大和仮名とかいふものを、極めて心やすく何の心配もなく、うかうかと書いてをられる。これに対し、漢字を書く方は、絶対に仮名を入れずに、漢字ばかりを、これもまた支那風に安心して書いてをられる。・・・私は歌をよむときには、仮名だけで綴るので、そのためにはや有名であるが、しかしその歌集の序文や跋文は、仮名と漢字を交へて書いてゐる。・・・七百年も八百年も前の或る個人の書き方、或る流派の書き方、それも公卿とか歌よみとかいふ人達の、すなはち特殊な階級、団体の書き方、さういふものを、現代の、生活をしてゐるものに、強ひることの馬鹿らしさ、と同時に、それに対して支那人に非ざるところの日本人に、できるだけ支那人の気分や思想通りに書けといふ統制を加へることの馬鹿らしさ。・・・私は実用といふものが一番高尚であると思ふ。実用ばかりではないかん場合に、少し実用になんとか工夫を加へてこれを美的に導く。それくらゐのところで総てのものはやめてゐたいと思ふ。・・・去年秋の日展に行きますと、何とも名状すべからざる字がある。成るべく人が判らないやうにしてゐる。履き古した草鞋に墨をつけて、屏風を撫でたやうな字がある。・・・いくら人が見ても、何をいつたつて判らせるものかと固く覚悟してゐるやうな字で、實にこれは間違つたことだと思ふ。・・・」（会津八一「書道の諸問題」昭和 25 年 3 月 18 日の講演より）

「・・・人が見ると同時に、書いてあることが頭に入る。・・・何人の思想でも感情でもが、発した人から受け取る人へ、何等の抵抗なしに伝えられるのは、この明朝体活字である。・・・知識を紹介するのが文字の一番大切なことであるから、何という字だかわからなければ面白い字だということでは、すでに邪道であろう。・・・どこまでも人にわかる字を書こう。・・・一つの練習を経なければならぬ。一つは、出来るだけ正しい筆画を書かなければならぬ。・・・文字は大体、新聞の字を信頼してもよろしい。嘘字を書いてはいけない。・・・それから、・・・筆は真直ぐにもつて、同じ太さの字を書く練習をしなければならぬ。・・・もう一つは、・・・平均に線を組み合わせて、そして線そのものは平らでなければならない。・・・私は、字というものは、どこまでも平明に書かなければならぬと思っている。・・・字を書きたいという人に向かいましては、・・・手本などはいらないから、ただ線をお書きなさいといふ。・・・画仙紙半切に、初めから終わるまで、同じ太さの平行線を書け。・・・それから横に書かせるのです。・・・右からでも、左からでも、樂に書けるようにしなければならない。・・・垂直線と水平線のほかに、・・・曲線を、やはり稽古しなければならない。・・・相等しい渦巻きを書くこと、中から外へ書いたならば、今度は反対に外から中へ書く。・・・こういうものを樂に書き得るもののが、手を動かす稽古をしていました。・・・私はいつも、電車の中でも、また人と話をしている時でも、こうやって渦巻きを書きながら手習いをしたものでした。・・・」（昭和 22 年春、会津八一「書道について」講演から抜粋）



八一笔

書道を長くやるには専長にやらない
といけない。決して一片の風流心とか安直な『趣味』などに囚はれてはいけない。また私の門下
だといつても、私に似たらそれでいいといふや
うなことではいけない。私は誰に似たのでもな
く、数十年かかつて文字と書道を歴史的に研究
して、その中から独特のものを見出して一家の
風を開いた。私の真似をするなら、その態度を
真似するのが一番大切です。・・・気長に根本的
に工夫を凝して一生の仕事としてかからないと
いけません。一寸見て、すぐ感じがいいとか、
趣味に共鳴したなどといふことは、門外漢とか
初学者のよくいふことですが、もっと深く目を
さましていくらか骨の折れる態度の修行を積ん
で、もっと深いところに趣味の満足を得られる
やうにありたいのです。・・・」（昭和24年4
月1日付、八一から福田雅之助宛葉書より）



初対面の会津八一と篠田桃紅（1950年代初め頃）

「天地にわれ一人いて立つごとき この寂しさを君は微笑む」歌人の會津八一が、法隆寺夢殿の救世觀音を詠んだ歌を桃紅さんは引用しながら、觀音様を君と詠む作者に限りなく共感されているのだった。一人で立つてゐるという會津八一の孤独と同じものを、たおやめの桃紅さんも持ち続けていた。それだからこそ、いつまでも美術家として現役なのだと思う。（作家・太田治子が読む「一〇三歳になつてわかつたこと 人生は一人でも面白い」（篠田桃紅著）より抜粋）



八一筆「壺中居」木額 昭和4年(1929) 62×187.5

(株) 壺中居藏 彫師は稻葉翠哲 壺中居は日本橋 3 丁目に
ある東洋古美術店

「・・・世間に手習といふけれども、手習をするといふと、まづ先生を選んで、そして手本を選んでもらつて、それを手本通りに書くことと思つてゐるやうですが、実際に馬鹿な話である。手習いといふことは、読んで字の如く、手を習ふことである。字を書くこの手を習はなければいけないのである。手を習ふといふことは、手の筋肉を、何千字書いてもこれに耐へるやうに訓練すること。出来るならば力強く、然しながら、平らかに動かすところの力を手に養はせることが、手習いである。世間でいふが如きものは、眼習いである。習字の手本を見て、それと同じものを書くといふことは、類似品を作ることであつて、悪いふならば、贋物を作るだけのことであつて、手本を書いた人の人格とか、時代とか、その人の趣味とかいふものを何もお構いなしに、ただ手本の字をそつくりそのまま書かうと一生懸命になつてゐる、だから、眼の方の練習になるか知れぬが、字といふものは、そんなことでは学ぶことは出来ない。・・・手本などはいらなくなから、ただ線をお書きなさい・・・」

（宮川寅雄『會津ハノ文学』より）



山田正平刻「会津八一印」「渾齋」の一対